「私たちを生かすもの」

マタイによる福音書 4:1-11
ヘブライ人への手紙 4:15.16

２０２４年2月11日
野村　友美 師

＜荒れ野での誘惑＞

朝晩はまだ寒いですが、２月も２週目に入って、花粉も飛んで、だんだんと春らしくなってきましたね。

さて、今日の聖書の箇所は「荒れ野の誘惑」と呼ばれる有名な場面です。ヨルダン川で洗礼を受けた後、イエス様は神様の霊である聖霊に導かれて、荒れ野で４０日間、昼も夜も断食をして過ごされました。現代日本で生活している私たちが、荒れ野に行く機会はほとんどないと思います。

イスラエルがあるパレスチナ地方の荒れ野は、ごつごつした岩と砂に覆われていて、乾いた地面に何とか根を張った草や、低い木が点々と生えているだけです。いざという時の食料も水も、安心して逃げ込める場所も、すぐには見当たりません。しかも荒れ野には毒蛇やサソリ、そして人を襲う獣たちがうろついていました。

それだけじゃなくて、旅人を狙う強盗たちに襲われる危険もありました。だから当時の人々は、荒れ野を通る時はなるべく一人でじゃなくて、集団で移動するようにしていたそうです。

いつ命を脅かされるかわからない、危険がいっぱいで不安で怖くて心細い。荒れ野はそういう場所だったんです。そんな荒れ野でイエス様は４０日、しかも何も食べないで過ごされました。

「空腹を覚えられた」なんて、さらっと書いてますけど、考えただけでも倒れそうになりませんか？食べ物は、私たちの体を生かすエネルギーになるものです。と言いながら、私は日曜日の朝は大体いつも朝ごはんを食べません。

何かと慌ただしくて気が急くので、食べない方が楽だからです。それでも礼拝が終わって、いろんなことが一段落してから、お昼ごはんなりおやつなりを食べると、力が湧いて元気になるのが自分でもよくわかります。

半日食べなかっただけでもそんな感じなのに、４０日間も何も食べていなかったイエス様は、どんなにぐったりなさっていたか。

「神の子なら、この荒れ野の石がパンになるように命じたらどうだ」という悪魔の誘惑がどんなに魅惑的だったか、と思わずにはいられません。

神様に頼らなくたって、あなたは自分でパンを生み出せるだろう？生きるために必要なものは、自分の力で手に入れたらいいじゃないか。

悪魔が言っていることは、確かにもっともです。神様から「何も食べるな」って言われたのだったらともかく、言われてないなら、別に意地を張る必要もないでしょう。

でもイエス様は、誘惑に従って自分の力で自分を生かそうとする、そのこと自体を拒まれました。

「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」

イエス様がお答えになったこの言葉は、旧約聖書の申命記から引用された言葉です。

かつてエジプトで奴隷として扱われていたイスラエルの民を、神様がモーセをリーダーにして救い出された時のことです。
エジプトから脱出して、荒れ野を旅するイスラエルの人たちに、モーセは神様からの掟である十戒を伝えて、こう呼びかけました。

「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」（申命記8:3）

神様があなたたちを荒れ野で飢えさせて、天から降るマナを食べさせたのは、人がパンだけで生きるのではないことを知らせるためだった。
そうモーセは人々に語りました。
人はパンだけで生きるのではなく、主の口から出るすべての言葉によって生きる。
この言葉が意識しているのは、古代パレスチナ世界に共通していたある価値観だっただろうと思います。
旧約聖書の時代から広く知られていた「ギルガメッシュ叙事詩」というメソポタミアの神話に、パンにまつわるこんなエピソードがあります。
野生の獣たちに育てられたエンキドゥという人が、ある時パンとビールを食べるようにと勧められました。でも、それまで木の実や動物の肉しか食べたことがなかったエンキドゥは、初めて見るパンが怖くて、なかなか食べられません。
そんなエンキドゥにかけられたのが、こんな言葉でした。「パンを食べなさい。それが生きるということです。」
当時の人たちにとって、パンは人間の知恵と技術が生み出した食べ物の代表でした。
だからパンを食べることは、「人が人間らしく生きる」ということの象徴でもあったんです。
自分の知恵と力を駆使して生きる、それこそが人間らしい生き方だ。そういう価値観の中で生きてきた人々に、神様はモーセを通して
「それだけじゃない」と教えておられます。
生きるためにパンは必要ない、人間の知恵も力も意味がない、ということではありません。
それぞれの知恵と力で生み出すものも大事だけど、人が人として生きるために必要なのはそれだけじゃない。すべてのものに命を与えて生かしておられる神様の言葉、神様の思いを聞いて応えることこそ、人が人として生きるために必要なものだ。そうモーセはイスラエルの民に呼びかけたんです。
このモーセの呼びかけを、イエス様は誘惑への答えになさいました。

＜私たちを生かすもの＞

人はパン「だけ」で生きるものではない。
神様の思いに心を向けて、神様と対話して、神様との関係の中で生きることこそが、私たちを本当の意味で人間らしく生かすものだ。
このイエス様の宣言は、他の誘惑への答えにも一貫しています。
悪魔は次にイエス様を、エルサレム神殿の高い屋根の端まで連れて行きました。そして今度は自分の方から、聖書の言葉を引用してみせます。
ほら、聖書に書いてあるじゃないか。神様は天使

たちに命令して、あなたをしっかり守らせてくださるんだろう？あなたの足が石に打ちつけられないように、天使が手で支えるんだろう？
本当にあなたが神の子で、神様の言葉によって生きているんだったら、神様の言葉を信じてここから飛び降りてみたらどうだ。こんな風に、誘惑は時に神様の言葉を都合よく切り取って
「聖書にこう書いてある」「神様はこう言ってる」と利用します。そこに込められている神様の思いは無視して、自分の価値観や欲求に神様の言葉を従わせようとする。この誘惑にも、イエス様は申命記の言葉でお答えになりました。
「あなたの神である主を試してはならない。」
自分の思いに神様を従わせようとするんじゃなくて、神様の思いに従いなさい。そうすればあなたは幸いを得る、神様が約束なさった恵みを受け取って、敵をことごとく追い払うことができる。　そう言ってモーセが人々に訴えた言葉を、イエス様はここで引用しておられます。
（申命記６：１６-１９）
だったら、と次に悪魔はイエス様に世界中の国々を見せてから、「あなたがひれ伏して私を拝むなら、これをみんなあなたに与えよう」と誘惑しました。でもイエス様の答えは変わりません。
退け、サタン。そう悪魔に命じると、イエス様は申命記の別の言葉を引用して、「わたしは神様との関係を生きる」と宣言なさいました。
３つの誘惑のどれにも、イエス様は神様の言葉に頼って抵抗なさったんです。悪魔の誘惑はどれも「神様以外のものに従って生きればいい」と呼びかけるものでした。
自分たちの知恵と力に従って、それが生み出すもので生きればいいじゃないか。
自分の価値観や欲求に従って、それを正当化して生きればいいじゃないか。
権力や繁栄を与えてくれるものに従って、それを拝んで生きればいいじゃないか。
そんな誘惑の声は、ずっと昔の荒れ野だけじゃなくて、今ここにいる私たちにも甘くささやきかけてくるでしょう。
「私は絶対に大丈夫、誘惑に負けたりしない！」と言い切れる人は、きっと誰もいないはずです。怖かったり淋しかったり、悔しかったり悲しかったり、苦しくて　体や心が弱ってしまう時が、誰の人生にもあります。
そんな時にこそ、誘惑の声は私たちの心に響くんじゃないでしょうか。４０日間何も食べていなくて、空腹で弱っているところを狙って
悪魔がイエス様を誘惑したのと同じように。
神様に従っていたって、良いことばかりじゃないだろう？
もっと自分を満足させてくれるものに従えばいいじゃないか。あなたは正しい、神様もあなたに従ってくれるさ。甘く優しく誘うその声に、イエス様は「そうじゃない」と神様の言葉に声を合わせてお答えになりました。
お創りになったすべてのものを愛しておられる神様の思いに心を向けて、神様の言葉に応えて、神様との関係を生きること。
それこそが私たちを生かすもの、人間として生きるための生き方だ。そうイエス様は宣言なさったんです。
人間として生きるって、どういうことでしょうか？

旧約聖書の創世記が伝える世界創造の物語は、人間が神様にかたどって造られて、神様から祝福されたこと、そしてこの世界のすべてのものを愛して大切にする役目を任せられたことを語っています。神様との関係の中で、命を与えられたすべてのものを大切にして愛と平和を実現して生きる。それが本来の人間としての生き方だ、と聖書は私たちに教えているんです。とは言っても、この世界の現実に目を向ければ、私たちは絶望するしかなさそうです。
愛も平和も、実現できるわけがない綺麗なおとぎ話みたいに思えます。悪魔に誘惑されるまでもない、自分勝手で弱くて傲慢な自分自身の姿を事あるごとに思い知らされます。
だからこそイエス様が、荒れ野みたいな私たちの世界の真っただ中にやって来てくださいました。誘惑の声を神様の言葉で打ち砕いて、すべての人の罪の責任を十字架の上で引き受けて、神様と人間の関係を回復させてくださいました。
復活されたイエス様の命は、私たちを新しく生かす神の国の命です。
新約聖書のヘブライ人への手紙が、イエス様についてこう証言しています。

「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。
だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」
（ヘブライ人への手紙4:15−16）

愛と平和を実現する生き方は、決しておとぎ話なんかじゃありません。イエス様を救い主と信じて、イエス様と一緒に生きることを選んだ一人一人の内で少しずつ、でも確かに始まっています。
誘惑されるし、悩むし、迷うし、何回だって間違えてしまう。そんな私たちの弱さも、イエス様が知っていてくださいます。だから何回でもイエス様に助けを求めよう、大胆に恵みの座に近づこう、と聖書の言葉が私たちを励ましているんです。
今週の水曜日から、今年もイエス様の死と復活の出来事を思い起こす受難節、レントの時期に入ります。罪の誘惑に従うんじゃなくて、神様の思いに従っていけますように。
私たちを生かすもの、愛と平和の実現を選び取ることができますように。
一緒にいてくださるイエス様に助けを求めて、ご一緒にお祈りいたしましょう。